

<今回>293回目 2021年5月14日(金)16時~18時 601会議室  
読書は10冊目「失われた九州王朝」再読 p305、違和の国交 より

<前回>292回目(21-4-23)出席者 6名

資料(21-04-23-1)前回のまとめ(清水)

(21-04-23-2)史料に一度しか登場しない資料名(清水)

(21-04-23-3)岩波文庫日本書紀第2巻補注、393頁。(清水)

A 報告 蔓延防止が施行されたが、会場閉鎖にはならなかったから、6名の参加を得て、開催した。他の用事で2名の方は欠席の連絡がありました。

B資料 2)日本書紀は一からの創作ではなく、作成当時(西暦723年)の史官たちが膨大な資料を整理し、矛盾するような記録も採録して、後世に判断をゆだねる謙虚な姿勢がみられる。またいちいち資料名を書く煩雑から1度しか登場させない配慮も見せている。譜第、帝王本紀、日本旧記。舎人親王以下の編集監督官の異論や指摘に対抗できるように準拠した資料を示していたのかもしれない。3)岩波文庫本の日本書紀第2巻の神功紀の補注に干支二運を遡上させていることを、百済の肖古王没年を例に記している。

C 読書 p293 四「隋書」倭国伝の示すもの から

1)日出所の天子 ①男帝(倭王)か女帝(推古天皇)か。②隋の遣い裴世清は倭王に面接しているか。男女を見分けられないことはない。外交には女王は出なかった？。

2)倭王の名前 通説ではタリシヒコと呼んで天皇の一般名として足、帯を当てている。直木考次郎は倭王=聖徳太子として、皇太子は日並皇子だからタラシヒコと称したことはありうるとした。倭国の使者が隋に行ったときに隋の役人に口頭で答えたものと想定した。しかし自己名を記さない国書はない。

3)「北」と「比」百納本24史には明確に「北」である。従来の学説は史料上の根本で重大なすり替えをしている。中国側の史料で北史(隋書を含む)史料にはオリジナリティはない。半島から来た「天の日矛」と同じく「天の帯矛」と称した。古田先生はこの本で筑紫鉾は高名というが、本当ですかと質問あり。

4)自撰の署名 多、利、思、は卑字ではない。むしろ貴字である。北は天子の座、弧は謙称。自署名とみるほかはない。名前の一部を中国側が誤伝したとの説は倭の5王の文字遊びと同じ当て物で学問でない。

5)疑いの山 ①姓について、天皇家にはない。(天のつく伝承は多くある)②政治思想 兄弟統治の思想は特異で天皇家にはない。(姉、弟統治の伝承は九州の神話の統治にはまある。)③跣は胡坐ではない。座禅の時の足の組み方。海東の菩薩天子を理想としていた。④冠位十二階も、微妙に異なる。徳、仁、義、礼、智、信に対して、徳、仁、礼、信、義、智。⑤官職 軍尼(牧宰) 伊尼翼(里長)、10伊尼翼が1軍尼であり、国でも稲置でもない。1人の牧宰が10人の里長を束ねている。⑥現地音は正確である。都斯麻(ツシマ)、一支(イキ)、竹斯(チクシ)。

次回日程 2021-5-28日(金)15時から18時 603会議室

—6-11日(金)16時から18時 かながわ労働プラザ第9会議室

—6-21日(月)15時から18時 かながわ労働プラザ第9会議室